女性学評論　第32号　Women's Studies Forum No. 32（March 2018）pp. 73-90

駒井静江と神戸女学院の音楽教育

津　上　智　実

KOMAI Shizue and Music Education at Kobe College

TSUGAMI Motomi

神戸女学院大学 音楽学部 教授
連絡先：津上智実　tsugami@mail.kobe-c.ac.jp

Abstract

KOMAI-AONO Shizue (1890-1973) studied at Kobe College from 1907-1914, following her elder sister Mitsue (1887-1970), who was enrolled in the same college from 1905-1913. Their school mates included the pianist OGURA Suye (1891-1944) and Mrs. Vories or HITOTSUYANAGI Makiko (1884-1969). The main sources for this discussion are the 'Students' Academic Records, 1903-1911,' and the 'Music Department Students' Lesson Records, 1907-1923.' Although the Aono sisters were students of the General Course and not of the Music Department, they earned good credits in 'Singing' and in 'Instrumental Music'. One later essay written by Shizue tells us that she resumed her piano lessons thorough the generosity of her music teacher, Miss F. Guppy. Judging from her career as a teacher of music as well as of English at Hinomoto Jogakkou and Kobe College, she must have acquired enough skill and knowledge in music in her college years.

Many American textbooks were used in music education at Kobe College, for example, A. Spengler's *System of Technic of Pianoforte*, ca. 1887, Wagner's *Musikdramas* arranged for a piano by Otto Singer Jr., G. C. Gow's *The Structure of Music*, ca. 1895, and J. C. Fillmore's *Lessons in Musical History*, ca. 1888.

The purpose of women's education and music education by Protestant missionaries was formulated as 'The emotions of her soul must find utterance in the universal language of God's living creature, Music' (L. H. Pierson, 1883). L. M. Gottschalk's *The Last Hope* played by OGURA Suye was one good example of such type of music and the other must have been everyday music played by KOMAI Shizue on the upright piano in the living room of the Dr. Komai's Residence (1927) designed by William Merrell Vories.

Keywords: Kobe College, music education, female education, piano, America

要　旨

本論は、日本音楽学会第68回全国大会パネル３「日本の洋楽受容史におけるアメリカ――ヴォーリズ建築の駒井家住宅（京都）をめぐる音楽空間から――」（2017年10月29日、於：京都教育大学）のために書かれた。

駒井卓夫人静江（1890-1973、旧姓青野）は1907年に神戸女学院に入学し、1914年に卒業した（３歳年長の姉光江は1905年入学で1913年卒業）。これはピアニスト小倉末子（1891-1944、在学 1905-1910）やヴォーリズ夫人一柳満喜子（1884-1969、1908年卒業）の在学期間と重なっている。青野姉妹は専門部卒業なので「音楽部レッスン帳 1907-1923」には記載がないが、「学生成績簿 1903-1911」によれば、「唱歌」や「器楽」も履修して好成績を収めている。音楽教師 F. ガッピーの好意で静江がピアノのレッスンを再開できたエピソードも伝わる。静江は後年奉職した姫路の日ノ本女学校や神戸女学院で英語と音楽の授業を担当しており、それだけの力を身に着けていたと思われる。

当時の神戸女学院で用いられた音楽教育の教材は、ピアノ教本は A. シュペングラー『ピアノ技法のシステム』（1887頃）が重用され、ヴァーグナーの楽劇のピアノ編曲版もボストン出版のオットー・ジンガー編曲版、音楽理論は G. C. ガウ『音楽の構造』（1895頃）、音楽史は L. C. フィルモア『音楽史教程』（1888頃）とアメリカ製が多い。

プロテスタントの女子教育と音楽教育において、「音楽は感情の自然な伝達の手段」（L. H. ピアソン、1883）とされ、日々の生活の中で人を支える存在としての音楽が目指された。その好例を小倉末子が弾いた L. M. ゴットシャルクの〈*The Last Hope*〉に見ることができる。ヴォーリズ建築の駒井邸（1927）の居間に据え付けられたピアノで、静江も日々そのような音楽を奏でていたと考えられる。

キーワード： 神戸女学院、音楽教育、女子教育、ピアノ、アメリカ

0）始めに

本論は、神戸女学院の普通科及び専門部卒業生である駒井（旧姓青野）静江を取り上げて、本学の音楽教育におけるアメリカを考える試みである。この試みのきっかけは、日本音楽学会第68回全国大会のパネル３「日本の洋楽受容史におけるアメリカ――ヴォーリズ建築の駒井家住宅（京都）をめぐる音楽空間から――」（2017年10月29日、於：京都教育大学）への参加をコーディネーターの齊藤紀子氏（お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所特別研究員、みがかずば研究員）[1] から求められ、上野正章（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究会研究員、音楽学）、山形政昭（大阪芸術大学教授、建築学）の両氏と共にパネリストとして加わったことにある。

京都北白川の旧駒井家住宅（1927年、現在は日本ナショナルトラスト管理）は、現存するヴォーリズ建築の中でも家具や調度など生活を偲ばせる状態で保存・公開されている点で貴重な存在である。居間にはウィンドウ・チェアの向かいにアップライト・ピアノと蓄音機が据えられて、家庭と団欒の中心に音楽があったことが窺われる。

パネル（10時５分から12時15分までの130分）では、齊藤紀子氏の問題提起と発表「家族新聞『団欒』（1924-25）にみる駒井夫妻と音楽」の後、上野正章氏が「戦間期京都における西洋音楽の楽しみについて」、山形政昭氏が「ヴォーリズ建築としての駒井家住宅」についての発表を行い、続いて筆者が下記の発表を行った後、質疑応答が行われた。

1）駒井（青野）静江と神戸女学院

駒井卓（たく）夫人の静江（1890-1973、旧姓青野）は、明治23年に四国の丸亀で青

1　文部科学省特別経費（国立大学機能強化分）「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」の助成をお茶の水女子大学から受けて企画された。

駒井（旧姓青野）静江（1890-1973）関係 略年表

1875：神戸女学院創立

1880：新構想の教育、声楽と器楽の時間

[1887年：姉光江（1887-1970）誕生]

1890年：四国丸亀で誕生（1903年に丸亀教会を設立した牧師青野兵太郎の次女）

1891：新高等科設置、唱歌1時間、音楽（器楽）週6時間

1894：音楽館設置

学生成績簿1903-1911

[1905年9月：光江、神戸女学院普通科に入学]

1905：W. M. ヴォーリズ（1880-1964）来日、小倉末子（1891-1944）神戸女学院入学

C. B. デフォレスト（1879-1973、在任 1905-1950、1915-1940 院長）着任

1906年の学科表

1906：音楽科設立

音楽部学生名簿・成績簿［レッスン帳］1907-1923

1907：最初の音楽科卒業生3名

1907年3月：松山東雲高等女学校卒業（普通科第14回卒業）

1907年4月：神戸女学院普通科4年に入学

1908：一柳満喜子（1884-1969）神戸女学院音楽科卒業

1909年の学科表

1909：音楽部に改称

1910：小倉末子、神戸女学院音楽部卒業

1911：F. ガッピー（在任 1911-1913）着任

1913年3月28日：卒業証書授与式で専門部卒業生の姉とオルガン・ピアノ合奏（曲名不詳）

[1913年4月～1945年9月：光江、松山東雲女学校教師、1918年3月前後オベリンに留学]

1913年12月：ソール女史30周年祝会にて生徒総代として英文祝辞を朗読

1914年3月：神戸女学院卒業（第31回専門部卒業）

1914年～1920年：姫路日ノ本女学校で授業を受け持つ（英語・音楽、金曜日）

1916：小倉末子、東京音楽学校ピアノ講師、翌春教授

1918年4月～1919年7月：松山東雲女学校教師［光江、オベリンに留学］

1919：ヴォーリズが一柳満喜子と結婚

1920年～1922年：神戸女学院教師（音楽・英語）

1922年：駒井卓（1886-1972、旧姓福田）と結婚

1923年～1925年：アメリカ滞在

1927年：駒井邸建設

1930：ガウ博士夫妻、女学院訪問

1933：神戸女学院岡田山キャンパス移転

1937年：ヴァンクーヴァにおける第四回汎太平洋婦人会議に日本代表の一人として出席

[1947年11月～1954年3月：光江、松山東雲中学・高等学校教師]

[1970年：光江没]

1972年：卓没

1973年：静江没

野兵太郎[2]の次女として生まれた。3つ上の姉に光江（1887-1970）がある。

この青野姉妹が共に学んだ神戸女学院は、1875年にアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の2人の婦人宣教師によって建てられた学校で、聖書を読んで讃美歌を歌うために、最初期から英語教育と音楽教育とに力を入れてきた。1891年の新高等科設置に際して、「唱歌1時間、音楽（器楽）週6時間」というカリキュラムが組まれ、1894年には専用校舎の音楽館が建てられた。1906年に音楽科が設置され、1909年に音楽部と改められた。

姉の光江は1905年の入学で1913年の卒業、静江は1907年入学で1914年の卒業（女26、大31）なので、それぞれ8年と7年、在学していたことになる。これはピアニスト小倉末子（1891-1944、在学 1905-1910）やヴォーリズ夫人一柳満喜子（1884-1969、卒業 1908）の在学期間と重なっている。

当時の音楽教育の実態を示す貴重な資料が2点、神戸女学院に伝わっている。一つは「学生成績簿 1903-1911」、もう一つは「音楽部レッスン帳」と呼び習わしている資料である。後者の表紙には「音楽部 学生名簿・成績簿 1907-1923」と記されているが、内実は何年の何学期に何調のスケールや、どの練習曲やどの曲をレッスンしたかという記録なので「音楽部レッスン帳」と呼ぶ[3]。ここでは主にこの2つの資料に基づいて、音楽教育におけるアメリカを考える。

一柳満喜子（音楽科第1回卒業生）と小倉末子（音楽部第3回卒業生）は音楽部の卒業生なので、レッスン帳に記載があるが、静江と光江は普通科及び専門部[4]の卒業生であるため、残念ながら音楽部レッスン帳には記載がない。しかしながら「学生成績簿」を見ると、静江も光江も音楽の授業で成績が与えられ、「Singing 唱歌」だけでなく「Instrumental Music 器楽」でも好成績を収

2　後に牧師となり、四国の丸亀教会を設立した。

3　詳細は、津上智実「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907-1923）の資料的価値とその内実」神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』57-2（2010）141-153頁。

4　当時の専門部には、英語科、哲学科、国語漢文科、生物科、理化鉱物科があった。

めている。これは、1896年の学則改正以来、「風琴、箏、点茶、挿花は生徒の余力あるものをして随意に学習するを得しむ」と規定されていることによる[5]。

明治期の「風琴」は、オルガンだけでなくピアノも含む場合があったことは、すでに塩津洋子の研究[6]で明らかにされているが、在学中に確かにピアノのレッスンを受けていたことが、後年の静江の回想録から判明する。それは1962年に同窓会誌『めぐみ』に掲載された「思い出すままに」[7] という一文である。ここで静江は、「今思い出すままに、私の特別にお世話になり、今でも忘れられない先生のエピソードを二、三申しましょう」と前置きして、次のように記す。

> 次は、ピアノのガッピー先生のことです。私はピアノが習いたくてたまらなかったのですが、相当高い月謝がいるので、ほとんど諦めていました。ところがある日、ガッピー先生がお室に私を呼んで「あんたは来月からピアノが習えるようになった」と言われたのです。もちろん驚きと嬉しさとで胸が一杯になりました。後でわかったことは、この月謝を先生がご自分で学校へ払って下さったのでした。それを知って私は泣いてしまったのでした。その後、私はピアノの不勉強を思うと、いつもガッピー先生に申し訳ない気がします。

ガッピー先生こと、フロレンス・ガッピー Florence B. Guppy（在任 1911-1913）は女学院の中でも全く知られていない音楽教師である。カリフォルニア・パシフィック音楽院の出身で、1911年9月から1913年9月までの2年間、音楽教師として神戸女学院に在職したが[8]、アメリカン・ボードのアソシエイ

5　津上智実編『山本通時代の神戸女学院』（日本キリスト教団出版局、2015）90頁掲載の「1906年の学科表」参照。

6　塩津洋子「明治期関西洋琴事情」大阪音楽大学音楽研究所年報『音楽研究』12（1994年7月）。

7　駒井静江「思い出すままに」神戸女学院『めぐみ』47（1962年6月）10-12頁。

8　神戸女学院五十年祝賀会編『神戸女学院史、創立五十年記念、明治八年、大正十五

表１）光江と静江の「器楽」の履修状況（Ａ＝普通部、Ｃ＝専門部、数字＝学年）

記載	科目	1907（A4）	1908（A5）	1909（C1）	1910（C2）	1911（C3）
Inst. mus	器楽	光江/静江	光江/静江	光江/静江		/静江

表２）洋琴練習生授業料（私立神戸女学院規則より）

年（専攻）	１学期	２学期	３学期	ピアノ使用料	合計
1911	９円	12円	９円	４円×３学期	42円
1912（音楽部生）	５円50銭	７円	５円50銭	同上	30円
同上（他学部生）	３円50銭	５円	３円50銭	同上	24円

ト・メンバーであって正式の宣教師ではなかったため、記録や書簡類がほとんど残っていない[9]。ガッピーは、1912年春の卒業式の集合写真に写っているので、そこからかろうじて容貌を知ることができる（写真１の２参照）。

表１は、「学生成績簿」に見る光江と静江の「器楽」の履修状況を表にしたものである。これを見ると、1907年から続いていた履修が1910年で一旦途絶え、1911年に静江だけ復活していることが分かる。ガッピーの着任は1911年なので、上述の回想録とぴったり符合する。

ところで、静江の言う「相当高い月謝」とは一体いくらだったのだろうか。私立神戸女学院規則「洋琴練習生授業料」によると、1911年には１学期に９円、２学期に12円、３学期に９円の計30円、これにピアノ使用料が「学期ごとに１日２時間使用で４円」なので、年間42円がかかったことになる（表２参照）。これが翌年には、音楽部生は18円、他学部生は12円に引き下げられた。ピアノ使用料は変わらないので、音楽部生は年間30円、他学部生は24円でピアノを習えたことになる。この値下げの背景には静江のような学生の存在があったものと考えられる。ちなみに1911年当時の42円は、週刊朝日編『値段史年表』（朝日新聞社、1988）によれば、第一銀行の初任給40円よりも高く、上級公務員の初任給55円よりは安い金額に当たる。

年』（神戸女学院、1925）115頁。

9　神戸女学院史料室の佐伯裕加恵氏にご教示頂いたことを感謝して記す。

静江は1913年12月の学院行事（ソール女史30周年祝会）において生徒総代として英文祝辞を朗読し、その全文が学報に掲載されているので[10]、英文科でもトップであったと思われるが、同年３月の卒業式では、卒業する姉の光江と２人で「オルガン・ピアノ合奏」を披露しているので[11]、演奏の腕前も人後に落ちないレヴェルであったと思われる（曲目は不詳）。

加えて、後年奉職した姫路の日ノ本女学校（在職 1914-1920）や神戸女学院（在職 1920-1922）においても、英語だけでなく音楽も担当している[12]ので、指導するに足る力を身につけていたと考えられる。

こうした事情で、青野姉妹のレッスン記録は残っていないが、同時期に学んだ一柳満喜子や小倉末子らのレッスン記録を基に、当時の音楽教育に見るアメリカを論じてみたい。

２）音楽部レッスン帳（1907-1923）に見るアメリカ

日本でピアノ教則本と言えばまずはバイエル[13]だが、神戸女学院では1900年から1902年にかけて初心者用に使われた記録は残っているが[14]、音楽科が設置された1907年以降は一度も使われていない。

代わりに、アブラハム・シュペングラー Abraham Spengler（1847-?）の *System of Technic of Pianoforte*（Philadaelphia: Theodore Presser, ca. 1887）が重用された。シュペングラーは1847年ペンシルバニア生まれで、1870年にライプツィッヒ音楽院を卒業し、ピアノとオルガンの教師として活躍したアメリ

10　神戸女学院『めぐみ』57（1913年12月20日）６および８頁。

11　神戸女学院『めぐみ』55（1913年３月20日）23頁。

12　静江の在職は「大正９年４月から11年３月まで」と神戸女学院『神戸女学院史、創立五十年記念』118頁にある。日ノ本女学校での在職期間と担当科目については、姫路日ノ本短期大学事務局総務課の村井泰子氏から情報提供を頂いた。

13　Beyer, Ferdinand: *Elementary Instruction Book for Piano*, Boston: Carl Prufer, s. d.

14　津上智実「明治期の鍵盤楽器の導入教育～『神戸女学院音楽部レッスン帳』の古層（1900～1902）を考える」神戸女学院大学女性学インスティチュート『女性学評論』29（2015年３月）157-175頁。

表3）音楽部レッスン帳に見るシュペングラー（小倉末子と一柳満喜子の場合）

年	学期	コメント
1907	秋学期	Exercises 60-82　[一柳満喜子：Part III, p. 33/2, p. 26/4, p. 37/7]
1908	冬学期	Continued　[一柳満喜子：pp. 34, 36, 37 continued]
	春学期	(scales) continued
	秋学期	continued
1909	冬学期	No record, but work carried
	春学期	17-20 (ascending)
	秋学期	Finished Spengler's regular exercises, and began on scale practice as in appendix, through keys C and a
1910	冬学期	Spengler's scales, G, e, D, b, A
	春学期	Spengler's scales, #f, E, #c, Broken chord practice in #c
	秋学期	Spengler scales, B, #g, G♭, e♭, and chromatic; and broken chords in same
1911	冬学期	Spengler Scale Practice, D♭, b♭, A♭, f, and broken chords in same (except f)

カ人である[15]。1887年頃にフィラデルフィアで出されたこの教本は、一柳満喜子と小倉末子のレッスンでも継続的に使われている。

表3に見るように、小倉末子はシュペングラーを終わりまで学んで、巻末付録のスケールを移調したり分散和音にしたりといった勉強もしている。ちなみに小倉末子は、この他に練習曲として、シュタルク、クラマー、クレメンティ、モシェレス、ヘンゼルトを神戸女学院で学んでいる。

次に、曲集で注目されるのはヴァーグナーの楽劇のピアノ編曲版である。小倉末子のレッスン記録を見ると、1909年の秋学期に、シューマンやショパン、ベートーヴェンと並んで、ヴァーグナーを4曲弾いている。(《タンホイザー》の)〈夕星の歌〉は暗譜し、〈ローエングリン前奏曲〉と〈エルザの夢〉、(《マイスタージンガー》の)〈ヴァルターの優勝の歌〉の4曲である。表4にまとめたように、翌年にも〈パルジファル前奏曲〉、《ジークフリート》の〈鍛冶屋

15　Howe, Granville L.: *A hundred years of music in America. An account of musical effort in America during the past century... together with historical and biographical sketches of important personalities.* Chicago, G. L. Howe, 1889, ? p. 714.

表4）小倉末子のレッスン曲：ヴァーグナー楽劇のピアノ編曲

学期	曲名
Fall Term 1909	1）Song to the Evening Star (mem.) [Tannhauser, III] 2）Prelude to Lohengrin 3）Elsa's Dream [Lohengrin, I] 4）Walter's Prize Song [Meistersinger, III]
Spring Term 1910	5）Prelude to Parsifal (memorized)
Fall Term 1910	6）Siegfried Forging the Sword 7）Siegfried's Funeral March

の歌〉と〈葬送行進曲〉を弾いているが、これらが誰の編曲によるものか、長いこと分からなかった。

ところがある時、音楽図書室に残る古い楽譜を見つけた。この楽譜には、当時小倉末子にレッスンをつけていたシャーロット・デフォレスト Charlotte B. De Forest（1879-1973、在任 1905-1950、1915-1940 院長）のサインと書き込みがあり、そこからデフォレストの30歳の誕生祝いとして、1909年2月にアメリカ在住の弟ジョンから贈られた楽譜であることが判明した[16]。〈夕星の歌〉には、ドイツ語と英語の歌詞がデフォレストの手で書き込まれており、弾き語りをした痕跡と考えられる。半年後、この曲がまず小倉末子のレッスンに使われた。その後のレッスン曲も、編曲の英語表記が一致することから、このオットー・ジンガー Otto Singer Jr.,（1863-1931）編曲版で弾かれたことはまず間違いない。これは1905年頃にボストンで出された楽譜である。

アメリカの作曲家による作品も少数ながらレッスンに使われているが、これについては後で論じる。

音楽科が音楽部に引き上げられた1909年から音楽理論の授業も開始され、小倉末子を始めとする学生たちが履修した。履修状況は学生成績簿で確認することができる。教材はレッスン帳の書き込みから判明する。用いられた理論書は、ジョージ・コールマン・ガウ George Coleman Gow（1860-1938）の *The*

16　津上智実「シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』（ピアノ独奏用編曲版）」神戸女学院史料室『学院史料』24（2010）35-42頁。

structure of music: an elementary text-book on notation and harmony, with full illustrations and abundant exercises; for use in the class-room, and for self-instruction (New York: G. Schirmer, ca. 1895) である。B 5 判、200頁で、第一部の記譜法ではピッチ、音価、ダイナミクス、音色について、シューマンやショパンらの実例を交えて説明が進められ、第二部の和声では、和声構造、和声進行、非和声音、声部書法、分析、数字付低音について、バッハ、ブラームス、ヴァーグナー、サン＝サーンス、グリーク等の例が豊富に引かれて、実作品に即して学ぶよう配慮されている。

現在、音楽図書室にはこの本が2冊残されており、一方には "Kobe College, Music Department, Teacher's Copy" の書き込み、もう一方には "Charlotte B. De Forest, Smith, 1901" の書き込みがあり、いずれもデフォレストの筆跡である[17]。つまり1901年にスミス・カレッジを卒業したデフォレストは、スミス・カレッジ教授（在職 1889-1895）だったガウのこの本で勉強し、それを持ち帰って日本での授業で使ったということになる。

神戸女学院は1933年にヴォーリズが設計した岡田山キャンパスに移転するが、校舎新築計画中の1930年にガウ夫妻は神戸女学院を訪れており、ガウ夫人から寄贈された寄付金でガウ博士を記念するヴァーグナーの胸像が設えられて、音楽館の階段踊り場に飾られた[18]。

もっともガウの教科書を使ったのは1915年までで、その後は1914年に出版されたルイス・エルソン Louis C. Elson (1848-1920) の *Theory of Music* (Boston: New England Conservatory of Music, 1914) などが使われた。

音楽史の授業も同じく1909年から開始され、教科書にはジョン・フィルモア John Comfort Fillmore (1843-1898) の *Lessons in Musical History* (Philadaelphia: Theodore Presser, ca. 1888) が使われるという形で、基本的にアメリカの教育が持ち込まれている。

17　津上智実「G. C. ガウ著の音楽理論書『音楽の構造』」神戸女学院史料室『学院史料』26（2013）12-20頁。

18　シ・ビ・デフォレスト『神戸女学院新築記念帖』（神戸女学院、1934）86-87頁。

当時使われた楽器もアメリカ製のものが多く残っている。1860年ニューヨーク・スタインウェイ社製のスクエア・ピアノは、カナダのモントリオールから寄贈されて、1890年に神戸山本通りの神戸女学院に届き、レッスンや演奏会に使われてきた。また、学内に残る5台の歴史的なリード・オルガンの内、2台がメーソン&ハムリン社製、他にエステー社製とウェスタン・コテッジ社製が各1台で、いずれもアメリカのメーカーによるものである[19]。

3）リベラル・アーツとしての音楽教育

川崎衿子は『蒔かれた「西洋の種」』において、ヴォーリズを中心とする近江ミッションを取り上げ、主に女性たちの活動を通して、宣教師が住生活の洋風化に残した功績を論じている[20]。その際、文化活動の一つとしてピアノの名を何度か挙げているが、音楽活動の内実には一度も立ち入っていない。音楽は弾き終わると消えてしまうので、演奏の痕跡を掘り起こすのは一般に困難である。その点、神戸女学院に記録や楽譜類が残っているのは、例外的で幸運な例と言うことができる。

一方、神戸女学院の75年史には、「アメリカナイズすることが学校の目的であったことは一度としてない」と明記されている[21]。実際、明治期の神戸女学院は、寄宿舎も学生用は畳敷き、服装も学生は和装で、三味線や琴といった和楽器も教授されていた。神戸女学院では生活の洋風化は目指されなかったのである。しかし、プロテスタント的な倫理感に裏付けされた、規律のある、無駄のない、簡素な生活は奨励された。これは当時の寄宿舎の規則などを見るとよく分かる。

さて、神戸女学院に音楽科を設立した功労者として知られているのはエリザ

---

19 津上智実編『山本通時代の神戸女学院、女子教育の黎明期とその歩み』（日本キリスト教団出版局、2015）55頁。

20 川崎衿子『蒔かれた「西洋の種」―宣教師が伝えた洋風生活』（ドメス出版、2002）。

21 Charlotte B. DeForest, *The History of Kobe College: compiled on the occasion of the seventy-fifth anniversary of Kobe College*, Nishinomiya, Japan, 1875-1950, p. 123.

ベス・タレー Elizabeth Torrey（1848-1921、在任 1894／1896-1909）である。一方、デフォレストは、岡田山キャンパスへの移転を実現させた第５代院長として知られ、専門は聖書と詩歌であって、音楽教育との関連で語られることは学内でもほとんどない。しかし上述から明らかなように、音楽科を音楽部に引き上げて教育を専門化したのは、実はデフォレストである。

デフォレストは父もアメリカン・ボードの宣教師で、大阪で生まれ、仙台で育った。「父は笛、姉はヴァイオリン、そしてデフォレストはピアノ」を弾き、家族でアンサンブルを楽しんで育った[22]。高等教育はアメリカで受けており、その際、音楽についても専門的に学んだことはガウの音楽理論書に夥しい書き込みがあることからも窺われる。これはリベラル・アーツとしての音楽教育が豊かな専門性を持っていたことを示している。

デフォレストは学内の演奏会でもピアノやギター、マンドリンの演奏を披露しているが、柴田環（後の三浦環）の伴奏で神戸の劇場に立ったこともある。1910年11月のことで、曲は「ドシン作曲デポコパア」[23]、記事の最後に「伴奏者ミス、デホレスト嬢も亦共に好評を博せり」と記されている。この時、柴田環は京都や大阪での演奏では東京音楽学校出身のピアニストと組んでいる。デフォレストが伴奏で舞台に立ったのは、遊郭を控えた歓楽街、神戸湊川の劇場相生座であった[24]。

デフォレストが音楽部の教育に力を入れていた時期の写真がある[25]。音楽館の前で1910年２月に写されたと考えられる写真で、デフォレストとカックロフトの音楽教師２人と生徒５人であるが、生徒でただ１人洋装を纏っているのが

22　竹中正夫『C. B. デフォレストの生涯、美と愛の探求』（創元社、2003）26頁。

23　これはロッシーニ作曲《セヴィリアの理髪師》中の有名なロジーナのアリア‘Una poco fa’のこと。詳細は、津上智実「婦人宣教師シャーロット・デフォレストの音楽活動：オペラ歌手柴田（三浦）環との共演」神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』57-1（2010年６月）163-176頁を参照。

24　津上智実編著『100年前の卒業生、ピアニスト小倉末子の軌跡』（神戸女学院「小倉末子展」実行委員会、2010）32頁に画像を掲載。

25　同上、29頁に掲載。

小倉末子である。

さらに、音楽教師としてのデフォレストが描かれた学生劇の台本が『めぐみ』誌に残されている[26]。1930年の学生劇で、場所は音楽館、登場人物は「デフォレスト先生、小倉末子さん、一柳まきさん、その他」、レッスン内容はスケールとアルペッジョ、バッハと曲（曲目不詳）とされている。

ここで小倉末子のレッスンで使われたアメリカ人作曲家の作品に戻りたい。小倉は、1908年春学期にゴットシャルクの〈最後の望み *The Last Hope*〉作品16（1854）を、1910年秋学期にウィリアム・メーソン William Mason（1829-1908）の‘Spring Dawn Mazurka’作品20を弾いている。

ルイス・モロー・ゴットシャルク Louis Moreau Gottschalk（1829-1869）はニューオーリンズに生まれ、11歳でパリに出て、弱冠15歳でサル・プレイエルにおいてリサイタルを行って、ショパンに才能を称えられた人物で、ヨーロッパで初めて認められたアメリカ人ピアニストである。アメリカに戻った翌年の1854年に作曲した〈最後の望み *The Last Hope*〉作品16は、当時のアメリカの音楽趣味を素早く吸収して書き上げた抒情的なバラードで、彼の代表作となり、半世紀に亘って非常な人気を博した。ラフマニノフの〈前奏曲〉嬰ハ短調と同様、ゴットシャルクはどこに行ってもこの曲の演奏を求められ、その人気はこの曲の主旋律が‘Mercy（Gottschalk）’という名称で讃美歌の旋律として定着したことからも知られる[27]。現行の『讃美歌21』にも442番として収められている。

この曲を小倉末子は後年、一度だけ舞台で弾いている。それは大正12年の関東大震災の後、被災者に布団を送るための募金活動の一助として、大阪中央公会堂で行われた慈善演奏会（1923年11月11日）においてである[28]。

26　神戸女学院『めぐみ』16（1930年7月）29-30頁。

27　S. Frederick Starr, *Bamboula!: The Life and Times of Louis Moreau Gottschalk*, Oxford U. P., 1995.

28　津上智実「ピアニスト小倉末子と大正期の女性運動」神戸女学院大学女性学インスティチュート『女性学評論』25（2011年3月）95-118頁。

『大阪朝日新聞』11月6日の記事で、「ゴツチヨルクの曲はこれまで余り公開的に演奏されたことを知らない。今度弾く〈最後の望み〉は女史が毎夜密室に跪いて祈祷する如く定まって弾いた寂しい詠歌的な曲」、また11月10日の夕刊では「[小倉] 女史が毎夜、母の祭壇に跪（ひざまづ）いて、祈るような心地で弾いていると云うなつかしい曲」と報道されている。小倉末子はこの曲を1908年の春学期にレッスンで弾いたが、それはちょうど小倉が母を亡くした時期であった。それから1923年まで15年に亘って小倉を支えてきた秘蔵の曲を、特別に披露したものと考えられる。

1883年に大阪のプロテスタント宣教師会議でルイーズ・ヘンリエッタ・ピアソン Louise Henrietta Pierson（1833-1899）は女子教育と音楽教育の必要性を次のように訴えた。ピアソンは共立女子学校と偕成伝道女学校を創設した宣教師である。

> In the education of woman not only are discipline and utility prominent considerations, but the graceful and innocent relaxations should occupy their appropriate niches in the general system of preparation and culture for her life work. The emotions of her soul must find utterance in the universal language of God's living creature, Music. From the lark soaring through the morning sky to the nightingale amid the solemn night shadows — from the deep intonations of the rolling thunder, to the soft whisper of the brook, music is the natural vehicle of sentiment. The character of a people is not only impressed upon their literature, but expressed in their national melodies. And here the women of Japan have an especial calling, in the inauguration of a new musical era for their country and their people. [下線引用者]

プロのピアニストでも、その人の内面を支える音楽が何であったかを知ることは難しいと思われるが、小倉にとっての〈*The Last Hope*〉は「感情の自然

な伝達の手段（the natural vehicle of sentiment）」としての音楽であったと考えられる。日々の生活の中で人を支える存在としての音楽が、ここにはあり、この曲はその好例を示している[29]。

駒井邸の居間に据えられたアップライト・ピアノで、家庭と団欒の中心として、静江も「日々の生活の中で人を支える存在としての音楽」を奏でていたと考えられる[30]。これらはいずれも米国プロテスタントの音楽教育の精神を体現するものと言うことができる。

29　学会のパネルでは最後にゴットシャルクの〈*The Last Hope*〉を録音で聴いた。演奏はアメリカ人ピアニストで作曲家のノエル・リー Noel Lee（1924-2013）。曲の冒頭部分と『讃美歌21』の442番「はかりも知れない」とを譜例として掲げて、理解の一助とした。

30　この点で、齊藤紀子氏から紹介のあった後年の駒井夫妻のインタビュー記事「健康、夫婦バンザイ、長寿のひけつ、駒井卓氏、静江さん」（『読売新聞』1971年5月16日朝刊23面）は興味深い。ここで静江は夫について「この人は疲れると私にピアノを弾かせるのですよ」と語っている。

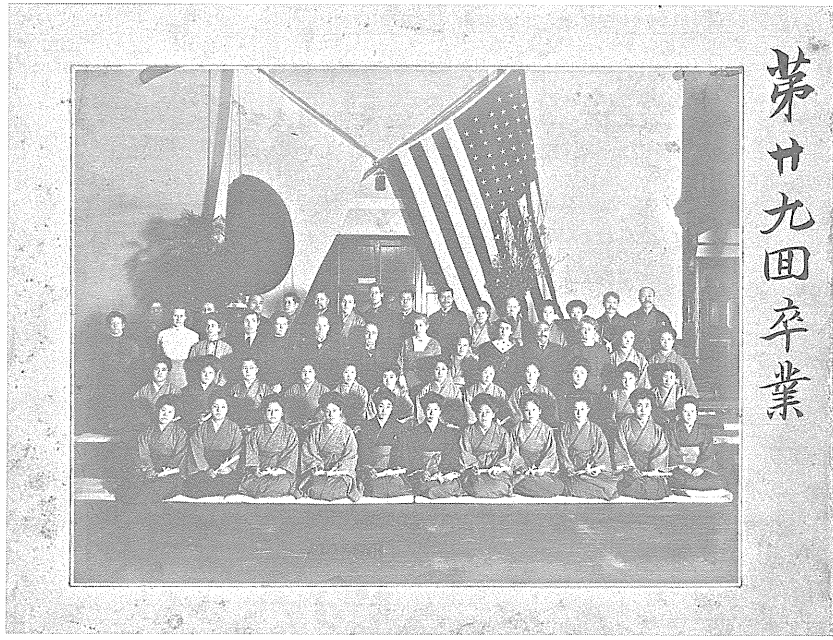

写真１の１）「本院職員及第二十九回卒業生」
神戸女学院『めぐみ』第54号（1912-7-1）巻頭

写真１の２）フロレンス・ガッピー
（神戸女学院音楽教師、在任1911-13）